

「 始まりの準備 」

—使徒行伝講解説教 2—

箴言
使徒行伝

第16章 33節
第1章 12節～26節

説教 本庄 侑子牧師

死から復活し、40日間地上に現れた主イエスは、天に昇られる直前、使徒たちに告げました。「エレサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。」(4節) それを聞いた使徒たちは、「オリブという山を下ってエルサレムに帰った。」(12節)

エルサレムは彼らにとって最も離れたかった場所のほずでした。立ち直れないほどの挫折や自分の醜さを思い出す場所だったからです。しかもエルサレムではなお、敵対勢力が力をふるっていました。彼らの多くはカリヤ出身でしたから逃げ帰れる場所があったのです。しかし彼らは「非常な喜びをもって」(ルカによる福音書24章52節) 困難の中に帰り、留まりました。

彼らには希望がありました。聖霊が与えられ、神が彼らを通して計画を継続なさるといふ希望でした。自分に欠けがあっても、後悔だらけの過去であっても、困難な状況に囲まれて未来が見えなくても、神がご自身の霊を注ぎ、神の計画に用いてくださるなら将来と希望があります。

エルサレムに帰った彼らはすぐさま、泊まっていた家の屋上の間にあがりました。隠れるためでも、対策会議を開くためでもありません。「心を合わせて、ひたすら祈をしていた。」(14節) そこにいたのは、人間的には絶対に相容れない人たちでした。ただ、彼らには一つの共通点がありました。主イエスを見捨てたということ。しかし、そんな自分の前に、死から復活した主イエスがやってきてくださり、再び名を呼ばれ、愛されたということ。そんな主イエスの愛に全てを委ねて祈る者になったということです。

祈り始めて数日が経った頃、ペテロが一つの提案をしました。ユダの代わりとなる使徒を選出しようということでした。ユダは12使徒の一人でした。しかし、主イエスを売り渡し、その報酬で土地を買い、地面に落ちて死んでしまいました。ペテロはユダについて語る時、どんな思いだったのでしょうか。主イエスを裏切ったのはユダだけではありませんでした。弟子たち皆が逃げ去ったのです。ペテロも三度、主イエスのことを「知らない」と言いました。誰一人、自分のことを差し置いて、ユダはとんでもない奴だったと語るなどできなかったはずです。

ペテロはユダのことを語りながら、ペテロたち他の11人も、本来は絶望に落ちていくしかな

かったと、自分たちの罪を告白したのではないでしようか。実際彼らは、主イエスが十字架で死なれた後、取り返しのつかないことをしてしまったという罪責感に震えながら、鍵を閉めた家の中に閉じこもっていたのです。復活された主イエスが再び来てくださり、名を呼んで赦し、愛して下さらなければ、過去への後悔や自責の念、将来への不安を抱えながらも、それらに鍵を閉めて、恐れながら生きるしかなかない、そんな一生を送ったことでしょう。

ペテロは旧約聖書の言葉を引用します。ユダの出来事によって旧約聖書の言葉が実現したことを示し、使徒の補充を促す言葉でした。ペテロは祈りのうちに、御言葉を通して示されたのでしょうか。ユダの裏切りさえも聖書の言葉の実現となった。私たちの罪も、失敗も、私たちに向かう神の愛と計画を挫折させることはできなかった。私たちの代わりに十字架について死に、そして復活してくださった主イエスに在って、全く新しい将来が与えられるのだと。

主イエスに在る将来の展望に立たされたペテロは、使徒の補充に関して具体的な条件を挙げました。当時はまだ信仰告白も新約聖書もありません。新しい人々が加えられる時、伝える内容に尾ひれはひれがついていきかねませんでした。一人補充するなら、他の使徒たちと同様、主イエスと始終行動を共にし、同じ内容を伝えられる人でなければならぬと判断しました。

思い当たる2人のうちから1人を選ぶのに、彼らはくじを用いました。くじは旧約聖書の時代から神の御心を知るために用いられていました。祈って引いたくじはマティアに当たりました。もう一人のヨセフの方が先にあげられ、いくつもの名前で呼ばれていたようですから、彼の方が人気があったのかもしれませんが、神の御心は人の思いとは異なります。使徒たちも、私たちも、人間の評価とは違う仕方で、神に呼ばれ、今ここにいます。

神は彼らを備えさせました。復活の主に出会っていただいた感謝と喜びに満ちし、自分たちの罪を言い表しながら聖霊の満ちしを求めて祈る者とし、御言葉を通して将来の展望に立たせ、具体的な備えをさせました。これが、伝道の始まりに、神が私たちに対してなされる備えです。

(記 本庄侑子)